

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 廣瀬 貴久

論 文 題 目

Accumulation of geriatric conditions is associated with poor nutritional status in dependent older people living in the community and in nursing homes

(在宅と施設入所の要介護高齢者における、老年症候の集積と低栄養との関係)

論文審査担当者

主 査 委 員

名古屋大学教授

濱 嶋 信 之



名古屋大学教授

委 員

伴 信太郎



名古屋大学教授

委 員

植 村 和 正



指 導 教 授

葛 谷 雅 文



論文審査の結果の要旨

要介護高齢者は、虚弱高齢者特有の老年症候群と呼ばれる、疾患とは異なる症候を複数有している。老年症候群の集積は、自立度や生活の質（QOL）の低下との関連や、健康障害や生命予後不良との関連が指摘されている。また、これまで多くの研究によって高齢者での栄養不良と自立度の悪化、QOL 低下や生命予後不良との強い関係が明らかにされてきた。

しかし要介護高齢者における栄養状態と老年症候群の集積との関係を検討したものは限られており、栄養状態が老年症候群の集積に影響があるか否かを 65 歳以上の要介護高齢者を対象とした前向きコホート研究参加者 1098 名の登録時データで検討した。栄養状態は、Mini Nutritional Assessment short form (MNA-SF) を使用し、0～7 点：栄養不良、8～11 点：栄養不良の疑い、12～14 点：正常に分類し、老年症候群の集積数は 8 項目（視力障害、聴力障害、過去一年の転倒経験、排尿障害、認知機能障害、移動障害、嚥下障害、食欲低下）ならびに栄養との関連が深いと考えられる、嚥下障害と食欲低下を除いた 6 項目に該当する数とした。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 研究参加者の 21.4%, 54.3%, 24.3%がそれぞれ栄養不良、栄養不良の疑い、正常と判定された。
2. 栄養不良では老年症候群の集積数が多く、嚥下障害、食欲低下を除いた 6 項目の老年症候群でも同様な結果であった。
3. 老年症候群の集積数が 1 増えると、栄養不良（vs 正常）のオッズ比（OR）は単変量ロジスティック回帰分析で 2.62（95%信頼区間 2.22-3.10, $P<0.001$ ）であった。6 項目の老年症候群でも同様の結果であった（OR 2.36 : 95%信頼区間 2.00-2.78, $P<0.001$ ）。併存症の重症度の指標である Charlson comorbidity index は栄養不良と有意な関係は認めなかった。
4. 単変量解析で有意な因子として抽出された年齢、性別、生活の場：施設（vs 在宅）、使用薬剤数、糖尿病ならびに高血圧症の有無を投入した多変量解析でも老年症候群の集積数は、8 項目でも 6 項目でも栄養不良と有意な関係が認められた [OR 2.51（95%信頼区間 2.11-3.00, $P<0.001$ ）、OR 2.21（95%信頼区間 1.86-2.64, $P<0.001$ ）]。さらに高齢者の生活機能の指標である Basic ADL を調整因子として投入しても、老年症候群の集積数と栄養不良の関係は保たれていた [OR 1.74（95%信頼区間 1.40-2.10, $P<0.001$ ）、OR 1.26（95%信頼区間 1.01-1.57, $P<0.001$ ）]。

本研究では、要介護高齢者での栄養状態と老年症候群の集積は関連が認められ老年症候群の有症率軽減の可能性において重要な知見を提供した。

以上の理由より、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。